令和８年度高等学校入学者選抜

学力検査の概況

高等学校教育課
義 務 教 育 課

令和８年度新潟県公立高等学校入学者選抜学力検査を令和８年３月４日(水)に実施し、学力検査の受検者を対象として、例年のとおり抽出調査を行いました。ここでは、全日制の課程の受検者の結果について考察します。

なお、抽出調査は、受検番号を指定することにより、学校ごとに抽出対象者を決定して行っており、今回の抽出人数は、全日制の課程の受検者(11,593 人)の約 5.1%に当たる 593 人です。

１　５教科の合計得点について

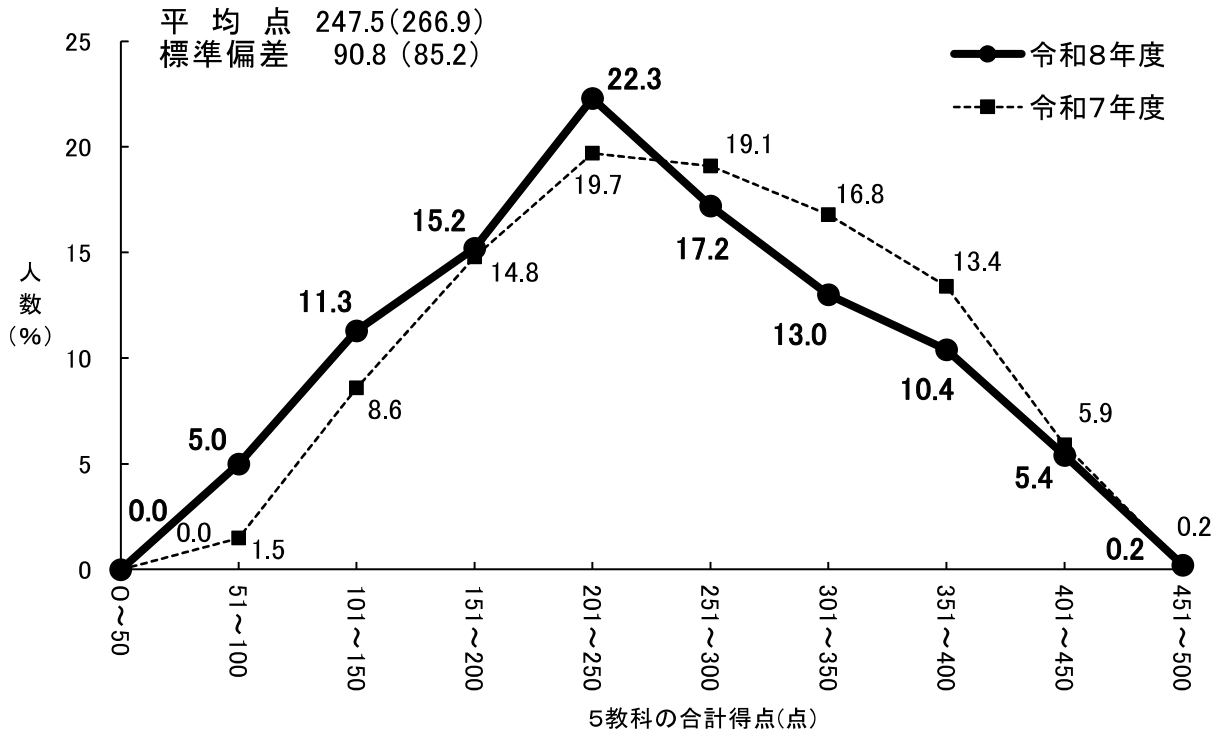
５教科の合計得点の平均点は 49.5 点(100 点満点換算)で、前回より 3.9 点下がりました。問題の作成に当たっては、中学校学習指導要領を基準として、小学校段階の学習内容の定着度をみるものから、中学校段階の応用力をみるものまで、多様な見方や考え方が身に付いているかどうかを測れるよう配慮して出題しました。また、前回の平均点や小問ごとの分析を参考にするとともに、中学校、高等学校から提出されている学力検査に関する意見・要望なども考慮して、問題の難易度を工夫しました。さらに、思考力・判断力・表現力をより適切に評価することができるように問題を作成しました。教科ごとの平均点をみると、前回と比べて、英語で上がり、国語、数学、社会、理科で下がりました。

次ページの**表１**は、過去 10 年間の、５教科の合計得点の平均点(全日制の課程の受検者、100 点満点換算)を示したものです。また、**図１**は、今回と前回の５教科の合計得点(500 点満点)の区分ごとの人数の割合をグラフに表したものです。割合が最大の得点帯は、前回と同じく 201～250 点であり、前回と比べて、250 点以下の割合が増加し、251 点以上の割合が減少しました。

表１　５教科の合計得点の平均点（全日制の課程の受検者、100 点満点換算）

年度	平均点
平成 29	51.4
平成 30	49.3
平成 31	50.5
令和２	55.5
令和３	55.2
令和４	49.9
令和５	48.1
令和６	47.6
令和７	53.4
令和８	49.5

図１　５教科の合計得点（500 点満点）の、区分ごとの人数の割合（全日制の課程の受検者）



２　各教科の平均点について

下の**表２**は、各教科の平均点を示したものです。また、**図２－１～６**は、５教科の合計得点及び各教科の平均点について、過去５年間の推移を示したものです。教科、年度によって若干のばらつきはあるものの、概ね 50 点前後で推移しています。

表２　各教科の平均点（100 点満点）

教　科	令和８年度平均点	令和７年度との比較	
		令和７年度平均点	増減
国　語	49.9	61.9	-12.0
社　会	58.3	60.2	-1.9
数　学	42.8	45.3	-2.5
理　科	46.4	49.8	-3.4
英　語	50.3	49.6	0.7

図２－１　５教科の合計得点の平均点の推移

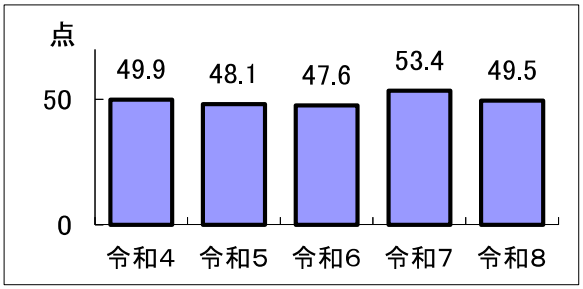


図２－２　国語の平均点の推移

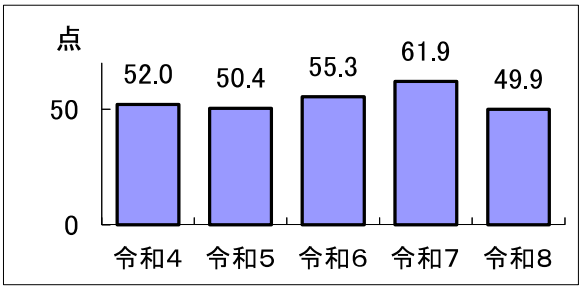


図２－３　社会の平均点の推移

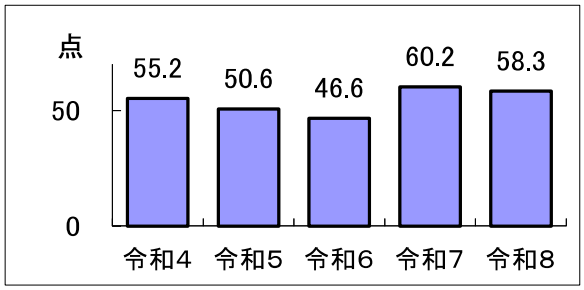


図２－４　数学の平均点の推移

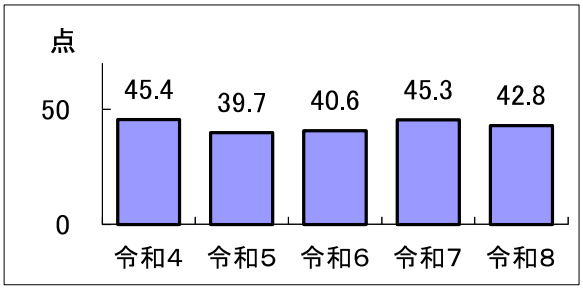


図２－５　理科の平均点の推移

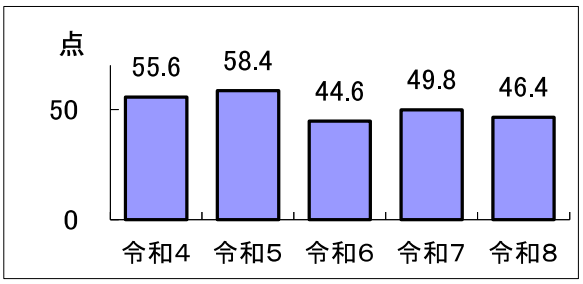
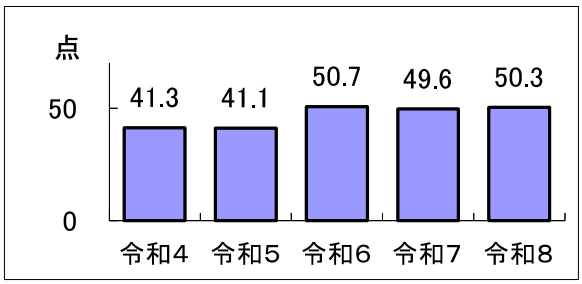


図２－６　英語の平均点の推移



３　各教科の得点区分ごとの人数の割合について

下の**表３**は、各教科の得点を５段階に分け、区分ごとの人数の割合を示したもので、これをさらに細分化してグラフに表したものが、次ページの**図３－１～５**です。

表３　各教科の得点区分ごとの人数の割合

教科／得点区分	国語	社会	数学	理科	英語
配点の 20%以下	1.7　%	4.9　%	16.2　%	8.3　%	8.8　%
配点の 21～40%	24.8　%	18.9　%	31.3　%	33.1　%	31.5　%
配点の 41～60%	50.3　%	27.1　%	29.8　%	35.9　%	26.0　%
配点の 61～80%	20.7　%	31.2　%	19.6　%	17.3　%	18.2　%
配点の 81%以上	2.5　%	17.9　%	3.1　%	5.4　%	15.5　%

「国語」は、国語に関する基礎的・基本的な言語事項の定着と思考力・判断力・表現力を総合的に測るため、出題形式を工夫し、幅広い分野から出題して到達度をより的確に把握できるように配慮しました。平均点は 49.9 点となり、前回を 12.0 点下回りました。得点の区分ごとの人数の割合を前回と比較すると、41～60 点の割合が 17.2 ポイント増加した一方、71～90 点の割合は 22.0 ポイント減少しました。基本的な問題における漢字の読みや歴史的仮名遣い、本文の内容を適切に説明したものを選択する問題の正答率は高くなりましたが、応用的な問題における、本文から読み取った内容を定められた字数で説明する論述型の問題で、正答率が低くなりました。引き続き、基本的な言語事項の定着を図るとともに、論理の展開や筆者の主張を捉え、文章から読み取ったことを説明したりまとめ直したりする活動等をとおして、思考力・判断力・表現力を育成するような指導が望まれます。

「社会」は、地理的分野、歴史的分野及び公民的分野のバランスを考慮するとともに、各分野の基本事項の理解度を問うものから、与えられた資料を活用する力を問うもの、社会的事象について思考する力を問うものまで、幅広い観点から学習の到達度をみることができるように配慮しました。今回の平均点は 58.3 点で、前回を 1.9 点下回りました。得点の区分ごとの人数の割合を前回と比較すると、０～30 点の割合が 5.4 ポイント増加した一方、31～60 点の割合が 4.2 ポイント減少しました。社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を確実に習得させた上で、地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明することなどを一層重視するような指導が望まれます。

図３－１　国語の得点区分ごとの人数の割合

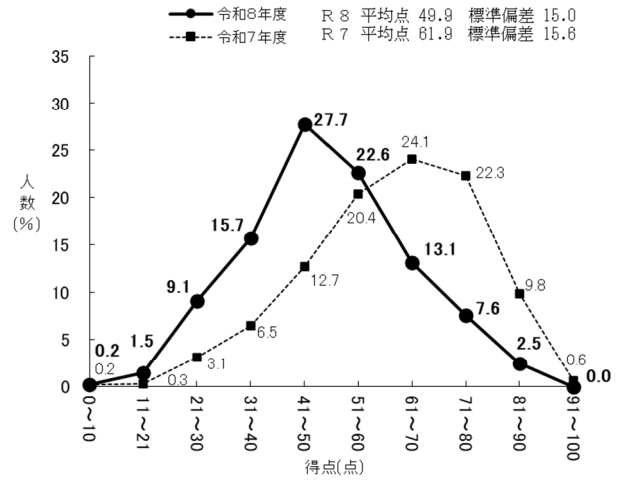


図３－２　社会の得点区分ごとの人数の割合

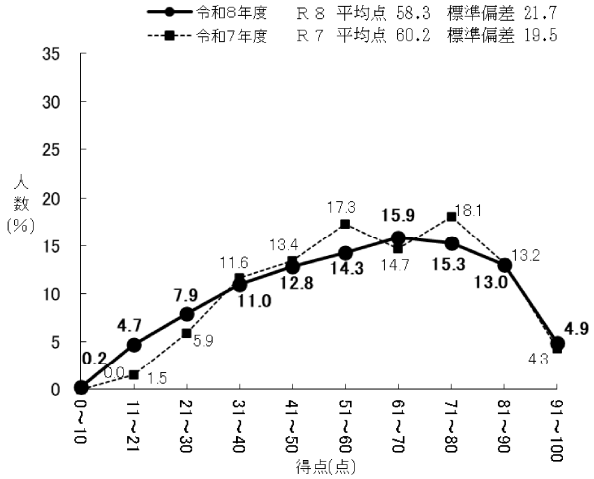


図３－３　数学の得点区分ごとの人数の割合

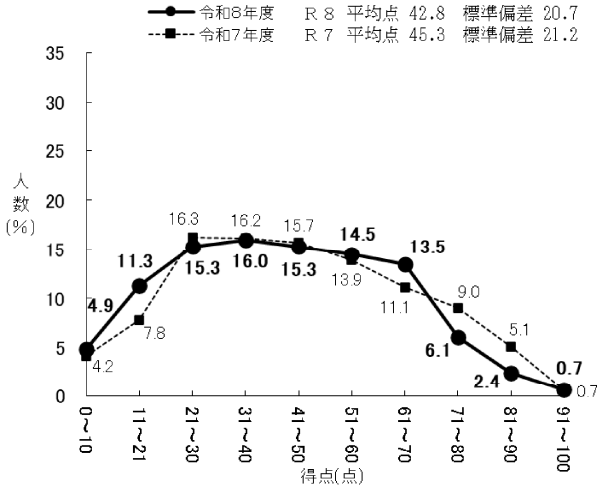


図３－４　理科の得点区分ごとの人数の割合

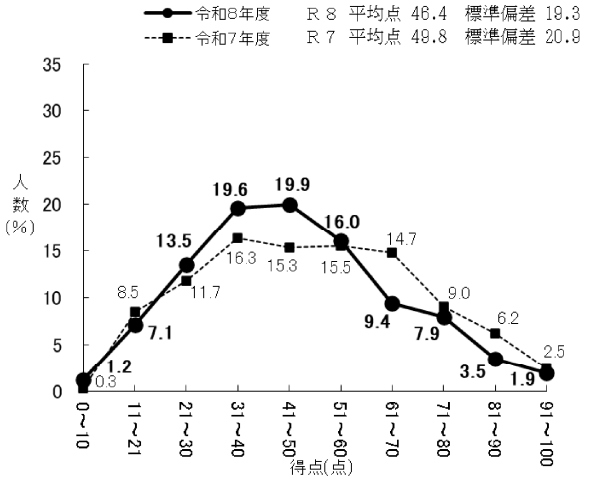
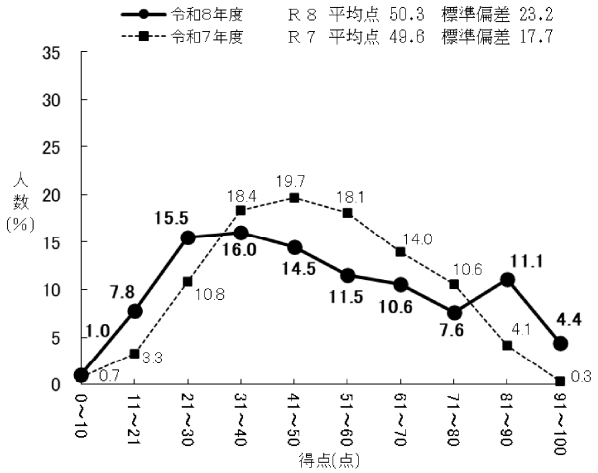


図３－５　英語の得点区分ごとの人数の割合



「数学」は、前半に計算問題や各分野の基本的な事項の定着をみるための問題を配置するとともに、後半には、「関数」「数と式」「平面図形・空間図形」の各領域において、事象を多面的・多角的に考察し、数学的に表現し処理する力や、数量や図形などの性質を見いだし、統合的・発展的に考察する力を問う問題を出題し、中学校における学習の到達度を把握できるよう配慮しました。全体の平均点は 42.8 点となり、前回を 2.5 点下回りました。得点の区分ごとの人数の割合を前回と比較すると、11～20 点の割合が 3.5 ポイント増加した一方、71～90 点の割合が 5.6 ポイント減少しました。数学を論理的に考察し表現する力や、式やグラフを相互に関連付けて考察する力、データを分析して批判的に考察し判断する力などを育成し、数学を生活や学習に生かそうとする態度を養うような指導をより一層促進していくことが望まれます。

「理科」は、第１分野と第２分野の学習内容が均等になるように配慮しました。基礎的・基本的な事項の定着を確認する問題に加え、実験・観察の結果から考察する問題や、複数の知識を組み合わせて活用する問題を取り入れ、中学校における学習の到達度を多面的に把握できる構成としました。結果は、平均点が 46.4 点となり、前回を 3.4 点下回りました。得点の区分ごとの人数の割合を前回と比較すると、21～60 点の割合が 10.2 ポイント増加した一方、61～100 点の割合が 9.7 ポイント減少しました。基礎的・基本的な問題の正答率が高い一方で、実験・観察の結果から考察する力を問う問題や、複数の知識を組み合わせて活用する力を問う問題の正答率が低くなりました。基礎的・基本的な知識・技能の一層の定着を図るとともに、実験・観察の結果を分析して科学的に考察、判断し、適切に表現する力を育成する指導を重視していくことが望まれます。

「英語」は、英語を正確に聞き取る力、英語で表現する力、長めの英文の内容を限られた時間の中で読み取る力等をみることをねらいとしました。イラストや資料を通じて、英文の内容を読み取る問題や、基本事項の定着度をみる問題とともに思考力・判断力・表現力を問う問題も出題しました。全体の平均点は 50.3 点となり、前回を 0.7 点上回りました。得点の区分ごとの人数の割合を前回と比較すると、41～60 点の割合が 11.8 ポイント減少した一方、81～100 点の割合が 11.1 ポイント増加しました。領域別では、話される英語の情報を正確に聞き取る力を問う問題の正答率が最も高く、英文の内容を正しく捉え、その内容に関する情報や自分の考えをまとめて英語で表現する力を問う問題の正答率が最も低くなりました。聞いたり読んだりしたことについて、積極的に自分の考えを相手に話したり書いたりするなど、言語活動に主体的に取り組ませて、５領域を総合的にバランスよく伸ばしていくことが望まれます。

４　問題の難易度について

下の**表４**は、過去３年間の小問正答率の度数分布（５教科合計）を示したものです。また、**図４**は、今回と前回の、小問正答率の区分ごとの小問数の割合をグラフに表したものです。前回と比べると、今回は正答率 10％未満～30％台、及び 50％台の小問数が増加し、正答率 40％台、及び 60～90％台の小問数が減少しました。

問題の作成に当たっては、生徒の学力の実態を考慮して、各教科とも基本と応用のバランスをとるよう工夫し、適切な難易度になるよう努めています。今後の出題に当たっては、各教科の小問ごとの正答率の分析結果を踏まえ、一層の改善に努めていきます。

表４　過去３年間の小問正答率の度数分布表（５教科合計）（数字は小問数）

区分／年度	10％未満	10％台	20％台	30％台	40％台	50％台	60％台	70％台	80％台	90％台	合計
令和６	9	7	16	24	20	32	13	11	14	11	157
令和７	5	9	12	16	18	16	26	28	17	13	160
令和８	6	12	19	17	14	24	20	24	14	9	159

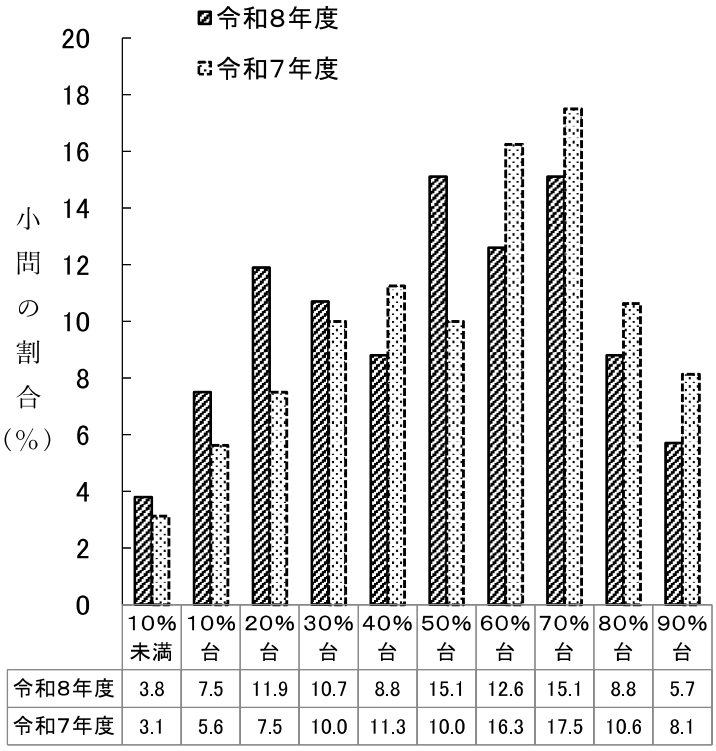



図４　小問正答率の区分ごとの小問数の割合